

「損翁宗益」考

鈴木 格 禪

損翁宗益（一六四九—一七〇五）は、ひたむきに永平道元の古風を慕い、東奥の辺境に正伝の仏法を鼓吹した江戸前期の禪将である。嗣法の門弟に、洞門きつての学僧面山瑞方（一六八三—一七六九）外十余名を打出したが、面山が『見聞宝永記』を撰し『損翁和尚行状』を著わさなかったならば、損翁は歴史の波頭に埋没せられて、その卓抜した宗教的世界や行実について、おそらく知らることはなかったであろう。

以下、面山の述ぶるところを中心として、損翁の為人と門風の一端を瞥見したいと思う。

一

損翁は羽州（山形県）米沢の人。慶安二年（一六四九）十二月二十七日に出生した。父は医を世業とした青木氏であり、母は佐藤氏である。出生の時、袍衣に卍の紋あり眼に重瞳があったという。万治三年（一六六〇）十二歳の時、禅林寺の蘭州

について薙髪し、その法益を聞いて参禅の志を抱いたが、蘭州が衣を更えて黄檗山に往くとき之に随わず、館山寺の要山泉宗に投じた。十六歳の時、寺衆が損翁の穎利を試さんとして『般若心経』を講ぜよといったところ、即座に応じた損翁は、流るる如き弁説をもって之れを講じ、一山の大眾をして驚愕せしめたと伝える。

寛文七年（一六六七）十九歳、江戸に出て楞嚴經の講席に列し、大いに感発せられたが、程なく郷里に帰り、専ら母に孝養を尽すかたわら、深夜孤り蒲団を携えて巖上樹下に打坐し、昧旦に至るを常とした。ある夜、定中に空裏に笛声を聞き豁然として契証する。後、海東に遊方し諸方の尊宿を勘驗するが、いずれも損翁契証の半提にも到らず、之を印証する者がなかったので、大いに法の澆簿を嘆いた。

そんな折、たまたま上州路に旅の僧より、加賀の国に月舟宗胡（一六一八—一六九六）が、大いに永平の家風を主張する

をきき、欣然として大乘寺に赴き、月舟より、「参禅はただ第二に落在せざらんことを要す」という示誨をうけて之を服庸し、月舟に親近した。時に、可山洞悦（一六二六）が助化して月舟の会にあったが、損翁は宗乗を商量して大いに激発せられた。可山は万安英種（一五九一—一六五四）竜蟠松雲（一六〇六—一六八二）の鉗鎚をうけた豪爽不羈の禅匠であった。後に損翁は可山の衣鉢を嗣ぎ、仙台泰心院八世として師席を董することになる。損翁が可山との商量によって、いかに感奮興起したか、その様子を『行状』は次のように記している。

時に（損翁）、血を刺して大悲神呪一百首を手書し、また掌燈を燃し、臂香を熱く。みな宿障を消して弁道増進せんことを祈るなり。（原漢文・括弧筆者註）

損翁はこの他に『法華経』八卷、『梵網経』一卷を血書している。『法華経』を血書するについての経緯は、面山の祖述に詳しい。

可山祖翁、初め禅堂を建てて規繩を資けはじめ。師、これに続いて仏殿を建てんと欲するも、衣資足らず、常住もまた闕乏す。因みに自ら血を刺し、法華八軸を書して化を有信に募って云く、余が血経一字の法施、以って汝等の為にす。汝等各各、五銭の財施を山僧に慳しまざれと。且つ日日、写経の余暇をもって妙経の要文を開示し、且つ血を刺して経を写すの因縁、および捨身の古蹟を説く。更に謂ふ。財法の二施は功德無量、自と他と性体二つな

し。汝等の財施は即ち是れ余が身血、余が身血は即ち妙法なり。八万四千の毛孔に、直に八万四千の陀羅尼門を開く。これを用ひて仏殿をつくるときんば、三世十方無量恒河沙の諸仏如来、一時に入り来りて、本地の法樂を増長するなり云々と。血を刺すこと春より秋に至る。財施を擲つ者、幾多なることを知らず。すなはち翌春に至りて仏殿落成す。正面に釈迦・迦葉・阿難の三を安じ両傍に架を為し、箱を造りて一代藏教を納む。衆僧、日日ここに詣して勤行す。之に因りて額を掲げて円伊殿と号す。乃ち鷹峰円老和尚の掾筆なり。師、ある時はいはく、身血を三宝にたてまつる者は、生まれて仏法に値ふの大幸なり。今、法界有情のためにするなり。生生の父母、兼ねて中に在せり。冥福よろしく円成すべきのみと。（『宝永記』原漢文・以下同）

当時、仙台田子村雲洞院の住持であった寂光は、可山の法嗣で損翁の法弟にあたるが、彼は損翁を評して次のようにいつている。

且つ山僧、師兄（損翁）を傍観すること凡そ十有余年、はじめ一、二年間は奮怒人に過ぐ。この故に喜び少し。三、四年間に、自然に喜び多くして奮激少し。近ごろ五、六年よりこのかた、喜瞋外に露れず、順逆を忘るるに似たり。けだし行住坐臥、自受用三昧に入るといふものか。一切の応対風の空を行くがごとし。奥州いまだ古へより、かくの如きの人あることを聞かず。その可山翁に超過することや、但だ一二重のみに非ずと。云ひ訖りて合掌してはいはく、尊し、尊し、山僧らが肩を並ぶべき底に非ずと。

（『宝永記』括弧筆者註）

損翁が大乘寺に可山の法を聞いて感奮し、大悲神呪一百を血書し、掌に燭を点じ臂に香を焚いたのは青年期のことである。しかし、法華八軸を血に刺して化を勧ったのは晩年の事に属する。奮怒人に過ぐ直情熱血の志操は、応待風の空を行くごとき円熟の時に到っても、その至心純情の行実の中に、なお鮮やかに生きつづけていたといわねばならぬ。

損翁は晩年、宗門を二分した宗統復古の大運動に荷担し、卍山道白（一六二六—一七一五）・梅峰竺信（一六二二—一七〇七）二師を援けて、一年ばかりを江戸に寓居した。宗統復古は、元禄十六年八月七日付の幕府条令によって一応終焉するが、この年春二月、笈を負うて肥後を出発した二十一歳の面山が、下谷土器街の寓邸に損翁と相見したのは、五月初五日のことであった。三月中旬、江府に達した面山は青松寺に掛塔する。青松寺には当代著名の老宿が往来したから、当然、彼らと親しく面接問法の機会があった筈であり、また面山自ら浅草の寓舎に卍山を訪ね、或は上野池端に徳翁良高（一六四九—一七〇七）を問うが、何故か損翁を生涯の師と択ぶ。人の出合いの不思議であり宗教的邂逅の妙である。

面山が損翁に随待したのは、元禄十六年五月五日の初相見より、その臨終に至るまでの、僅かに七百五十余日にすぎない。しかしながら面山は、この間に、損翁より決定的な影響を受けてその生涯を莊嚴する。面山は法を説くのに親切であ

った。後年、面山は若州小浜の空印寺に住し、また永福庵を創めて演法と著述に専念するが、世人は面山演法の親切を、老婆心のそれと兼喩して、「お婆々面山」と評した。面山のかかる親切は、もとより面山自身の性情によるものであることは論を俟たぬが、それを長々出せしめた直接の機縁は、その師損翁の影響によることが、決して少くはなかったように思われる。

宝永二年（一七〇五）五月下旬の頃より、損翁の気力は漸々に衰えを示し、六月に入って著しくなった。損翁を診た官医は説法開示の中止を勧告したが、損翁は、「たとひ医療を加ふとも、また幾日を延べんや」と肯がわず、日日開示を懈らなかつた。六月十一日開示終了の後、洩る呼吸に喘ぎながら損翁は、説法の終焉を宣言し、損翁手度の実姉、貞甫禅尼の庵に入って門を閉ぢた。十七日、面山は潜かに損翁に伺候する。その時の状況を面山は「師、室の扉を開かして容れ、もって大いに喜ぶ。且つ謂く。常に憶へり、末後は上堂し、須弥座上において、坐脱して大衆に別れんと。然るに今かくの如し。力弱く氣衰う。大小の行来なお自在ならず。いかでか拄杖を提るの力あらんや。さきの計りごと皆たがへりと。この時、辱く余が出処進退の要訣を示さる。且つ、初め土器街の相見より、今の末後に到るまで、始終随侍して他に遊ばず、宿縁深厚の旨を説きたまふ。また、生生世世、大法を担

荷するの誓願を示したまひ、了って落涙さる。余、感泣に堪へず」(『宝永記』)と述べている。損翁が「我れ病魔防ぎ難し、在世久しきに非ず、汝よく保重して以て祖恩を報ぜよ。永祖の面を見て、他の面を見ざれ。是れ吾れが汝を得るの大因縁なり」(『面山年譜』)と遺囑示誨したのは、おそらくこの時であったにちがいない。面山宗学の骨格をなすところの

ただ永祖に一如して、永祖の用ひざるところは、天下挙げて之を用ふと雖も、山僧用ひず。永祖の用ふところは、天下挙げて之を用ひずと雖も、山僧従つて用ふ。唯だ、永祖の面を見て他の面を見ず、他の弓を挽かず、他の馬に騎ることなし。豈に、他の我れを是非し、我れを褒貶することを管せんや。(『建康普説』)

という至純な信仰の表白は、損翁がその一生を尽した誓願の直接線上にある。

損翁の面山に対する示誨薰陶は、慈悲親切を極めた。面山は「福縁の浅薄は恨むべしと雖も、また慈訓親切の諄諄を蒙ることは多く、兄弟の未だ敢て聞かざる所に至る。豈に感幸ならずや」(『宝永記』)といい、「二年の提携、十年の遍参に超過す」と述懐している。宝永二年六月二十四日夜半、褥上に端坐して損翁は逝った。「生也無所從來、死也無所去処。咄、都来錯」。損翁の遺偈である。世寿五十七歳、法臘三十有五。嗣法の門弟十余名、剃度の男女三百余人、菩薩戒を受けたる者六千余指。塔を仙台青葉城の北、芋沢の普門庵に建

つ。号して「太容」という。

面山は損翁を敬愛して、『見聞宝永記』に敢て「損翁老人」の名を冠した。「時々、師の慈容悲訓を追憶すれば、感激の禁じ難き、恰も腸の裂くるが如し」(『宝永記』)という面山の悲涙に、深く法に結ばれた類稀れなる師資の人間像をみる。「損翁老人」の称呼は、老人の滅後約三百年の風霜を閱した今も、なお親愛と崇敬の情をもって知音の人口に膾炙している。

二

面山は損翁の寂後「その道や秋霜凜烈の如く、その徳や陽煦の柔温なるに似たり」(『面山広録』第七)と讃え、三十七回忌に際しては

懷昔三十六暮前。東武城辺劍倚天。不顧危亡侵白刃。法門面授忽成円。尋追法駕到仙館。執奉巾瓶三越年。慈似融融春煦爾。威如烈烈曉霜焉。常開先德未開口。幾許驚看火裡蓮。古仏永平真再出。半千年後絶齊肩。弁魔揀異眼懸鏡。仏仏要機得正伝。我等幸哉蒙顧命。実斯一大事因縁。(同上)

と、追懷と感恩の法語を述べているが、「永祖の面を見て他の面を見ず」、「道」に峻厳であった損翁の行実は、次の挿話によっても窺うことができる。

師、因みに仏殿に赴く次で、廊下の机上に、俗書の永平の弁道話

の上に重ねてあるを見、侍者の益潭に問ふて曰く、是れ誰の机ぞやと。侍者云く、僧の益光なりと。乃ち方丈に歸りて後、忽ち鐘を鳴らして衆を集め、益光を擯出す。光や晩間、大衆を憑みて陳謝す。師の曰く、一七日懺悔して、三千仏および歴代祖師、永平高祖を礼さば則ち赦さんと。光や之に従ふ。（『宝永記』）

損翁が泰心院に住してから、隣峰三十余箇寺の住持を観察してみたところ、永平道元には一向に疎略の様子であった。永平の法中に僧となり、その恩沢に浴しながら、しかも祖師への信なきを慨いた損翁は、毎月、永平報恩講を催して祖語を開示し、信心を勧発すると共に、自ら率銭して毎歳永平の祖像二尊を造り、各寺に之を安じて、毎月慇懃に供養せしめた。中には心衷これを嫌う者もあったが、損翁は意に介せず、一住十余年の間に凡そ三十尊を造って各寺に祀らしめ、生生世世の結縁の資とした。醉婆羅門の故事に倣った損翁の、誓願の所為である。

また、某日の夜参に、損翁は衆に示して言った。「天然においては釈迦世尊、震旦においては達磨大師、日本においては永平高祖なり。然れども其の中において、我等が今日、無上の大法を聞くものは、是れ永平高祖の大法恩に由るのみ。釈迦よりも最上に、達磨より最尊なり。苟も永平あらずんば、いかでか釈迦、達磨の尊重なる所以を知らんや。その正法眼蔵一部は、迦葉に附嘱せる一代蔵教と無二無別なり。之

を尊重することを知らざるものは、畜生、畜生と。言中に響あり。自ら衫袖をもって落涙を拭はる。其の平日、永平を重んずることかくの如し」と（『宝永記』）。後年自ら校訂せる『正法眼蔵随聞記』に、永平道元を称して「実に祖師は日本の無上尊なり」（同書凡例）と讃えしめた面山の根底には、かかる損翁の心情が貫流しているように思われてならない。

三

かくて、自らの仏法の根基と準繩を、只管に永平道元におき、宏智正覚を仰慕した損翁は、次の如くいう。

昔、宏智禪師、仏祖正伝の打坐を主張して黙照銘を作る。大慧の杲禪師、之れを毀謗して黙照邪禪といふ。然して自ら倡ふところの禪は、すなはち公案を提撕するなり。嗚呼、仏祖正伝の三昧や邪か、後人私案の禪や正か。真歇和尚、信心銘拈古をつくりて、専ら杲老を弾ずるものはこれに因りてなり。永平祖師の法兄、無外遠和尚、拈古に跋して略ぼその意を露はす。永平祖師もまた大慧を弾ずるの詞、最も多し。永覚禪師等、洞上と雖も専ら大慧に担荷す。支那の禪の、正伝の要機を失却する所以なり。支那は且らく置く。今日永平の流れを酌む者、択法の眼なし。正か邪か、混合して分つこと莫し。恨むべきかな。（『宝永記』）

また

日本の一向宗・日蓮宗、共に天台より出でて天台の本旨を失すといふ。吾が門の看話の禪、達磨の遠裔より出でて壁觀の本旨を失

するも、また同じ。時、末法に至りて、魔は強く法は弱し。たとひ看話をなすも亦た五百年前は相似の打坐なり。近世に到りては、我慢貢高、他を凌ぐを悟りとなし、見解となし、或は警策をもって頭顱を打破し、或は大声を揚げて問答し、互いに罵詈訛謗す。みな魔に摂せられて、仏法の身心氣息を失去する底の所為なり。是れ、支那・日本、洞濟共に、看話の外に、仏仏の要機あることを知らざるに職由するなり。然るに吾が輩、辱くも永平祖師の光明を蒙りて仏祖の要機を知り、七仏正伝の蒲団に安坐す。只だ自ら歓喜踊躍するのみ(同上)。

ここには、仏法の時弊に対する痛烈な批判と、憂宗の至情がある。永平の仏法に常に照準を合せた損翁の教界批判は、かつて自らが参随し私淑した月舟の、容槩的態度にも暗に向けられている。

師、常に謂く、永平清規に弁道法あり。これ僧堂裡の進退なり。今の禅堂と大ひに異なる。若し祖規に随順して、一たび僧堂の打坐経行をなさば、生涯の本望足りぬべし。然るに、近世多く僧堂を改換して以て禅堂となす。祖規の衰廢すること悲しむべし。卅老の徳行すら猶ほ祖規を再興するに至らず、況んや我が輩の此に及ぶ所ならんや。この大願、しばらく再生を待つのみ(『宝永記』)。

という損翁の歎きは、密かに「相樹林清規」をも諷したものであると思われる。損翁自らは当然、「もっぱら永平の正宗を唱へ、坐禅経行、祖規に一如して、少しも今時諸方の風に倣はず」(『行状』)、ことに、「泰心に住してよりは祖規を勃興し、冬夏の結制規式を嚴肅」(同上)に修行した。

当時の教界にあって、禅の弊風と荒廢を慨歎したのは、独り損翁だけではない。洞門においては独庵玄光(一六三〇—一六九八)が、済下においては盤珪永琢(一六二二—一六九三)が、磧下においては潮音道海(一六二八—一六九五)が、いずれも論鋒鋭く禅界を批判し、独自の禅風を挙揚して各々その妍を競った。損翁は、しかしながら自ら深く信奉する永平正伝の利剣を振って、容赦なく彼等が葛藤の根源を截断する。ここでは、独庵・盤珪はしばらく措き、潮音道海に的を絞って、その門風の一隅を窺ってみたい。

五

承応三年(一六五四)、明より隠元隆琦(一五九二—一六七三)が渡来し、斬新な黄檗の禅風を鼓吹して日本の禅界を衝動せしめ、多大の影響を興えたことは周知の通りである。隠元の渡航は損翁六歳の時である。したがって損翁はその生涯に、禅流各派の動揺と変容の事態を具さに見聞することになる。損翁にとって他門はさもあらばあれ、永平の古風が喪われゆくことは、由々しき大事として映ったに相違ない。宗統復古に際し、「日本洞上の中興」と讃辭を措しなかつた円山ですら、完璧には道元の古規を墨守し得なかつた憾みがある。洞濟兩派とも滔々たる時代の潮流の底で、容槩・反槩相拮抗する趨勢にあったが、損翁はかかる風潮に屹立し、嚴として

永平の古風を撲守し演暢した。

『見聞宝永記』において、槩派および潮音に関する記載は僅かに四箇所を出でないが、正面きって潮音を駁したのは、次の一文である。

師曰く、東渡の隠元禪師は晚明の英傑なり。門下に出ずる者、木庵に越へたるは莫し。木庵に嗣ぐ者は潮音を最となす。潮音の倡ふところは、すなはち隠元・木庵の直指なり。潮音著はすところの坐禅論一冊、いま世に行はる。これを読みて即ち知る、明朝実に仏祖正伝の修証を失へることを。その論ずるところは、唯だ元明の禪師の私案に拠るのみ。未だ二乗の観練に及ばざるに似たり。何ぞ摩訶衍の三昧を望まん。況んや、之を少林の壁觀に擬せんや。汝等、禅余を以て之を読み、永平祖師が家訓の坐禅と対決せば、則ち黑白たちどころに分たん。古人、これを異を揀ぶといふ。努力めよや。

文に知らるるごとく損翁は、難すべき論書を徒らに嫌忌せず、比較して黑白を学べと学人を提撕している。ここに損翁の寛容と、「道」に対する誠実な態度が、はからずも表出せられているように思われる。

損翁のいうごとく潮音は、木菴性瑫（一六一一—一六八四）に嗣いだ博学多才な一世の師であり、扶桑に黄檗の禅風を確立した教界の雄である。しかも、法理整然、言端平明、世人にその並びなき化を賞揚せられた槩下の驍将である。『宝永記』にしるされた損翁の言辭は、簡明にして要を尽している

が、その潮音を駁する源由や如何。

潮音の『坐禅論』は、近時ほぼ稀觀に属するという。よってその全文を原文のまま掲げたいと思う。

坐禅論序

日昇月降。風吹雲起。兔走鳥飛。以至。人間起居屈伸。悉是真如三昧之力也。然則。安然静慮。還是一乘枷鎖也。雖然与麼。上根大機者眇。劣器少根者夥矣。故随_レ佗意起_レ慈雲。造_レ此論_一布_レ寰宇。具眼上流。定謂。為_レ蛇画_レ足者也。

延宝戊午冬臘月仏成道日

萬徳海潮音自題於大慈丈室圓印

坐禅論 萬徳嗣祖沙門道海述

坐禅者。三学之中一学。六度之中一度。而法門綱領。修行眼目也。故三世諸仏。脩_レ之成仏得脱。歷代祖師。行_レ之見性明心。然則。欲_レ見性成仏者。除_レ此門_一外。別無_レ行門_一矣。且坐禅。有_レ体有_レ用有_レ理有_レ事。如何為_レ体。真如者是三昧本体。仏性者是坐禅根源。又。三昧者一切諸仏与衆生身_一平等無_二。即名_一一行三昧_一。又謂_レ之性徳_一矣。所以永嘉曰。行亦禅坐亦禅。語默動静体安然。如何為_レ用。坐禅者外於一切善惡境。心念不_レ起為_レ坐。内見_レ自性不_レ動為_レ禅。又。外離_レ相為_レ禅。内不_レ乱為_レ定。又謂_レ之脩徳_一矣。故初祖曰。外息_レ諸縁。内心無_レ喘。心如_レ牆壁。可_レ以入道。如何為_レ理。衆生自背_レ離真如三昧_一。以_レ攀縁慮知_一為_レ本心。是故。中古先徳。設_レ方便_一。教_レ学人_一与_レ没滋味公案_一提撕。蓋設_レ法繫_一住其狂思横計。令_レ沈_レ識慮_一到_レ專_一之地。驀然発_レ明心_一。

非外来。向來公案敲門瓦子。大慧曰。就不可思量處思量。心無所之。如下老鼠入牛角。便見倒斷也。高峰曰。先將六情六識。四大五蘊。山河大地。万象森羅。總鎔作一個疑團。頓在目前。不似一鎗一旗。靜悄悄地。便似一個清平世界。如是行也只是個疑團。屙屎放尿也只是個疑團。以至。見聞覺知總只是個疑團。疑來疑去。至省力處。便是得力處。不疑自疑。不舉自舉。從朝至暮。粘頭綴尾。打成一片。無糸毫縫罅。撼亦不動。越亦不去。昭昭靈靈。常現在前。如順水流舟。全不犯手。只此。便是得力底時節也。更須慙其正念。慎無二心。展轉磨光。展轉淘汰。窮玄盡奧。至極至微。向一毫頭上安身。孤孤迥迥。卓卓巍巍。不動不搖。無來無去。一念不生。前後際斷。從茲塵勞頓息。昏散勦除。行亦不知行。坐亦不知坐。寒亦不知寒。熱亦不知熱。吃茶不知茶。吃飯不知飯。終日默然。恰似個泥塑木雕底。故謂。牆壁無殊。纔有遮境界現前。即是到家之消息也。決定去他不遠。也巴得構。也撮得著。也只待時刻而已。又却不得見怎麼說。起一念精進心。求之。又却不得將心待之。又却不得要一念縱之。又却去不得要一念棄之。直須堅凝正念。以悟為則。如何為事。坐禪有四種。曰常坐。曰常行。曰半坐半行。曰不坐不行。中古以來。以半坐半行為禪堂規則。要坐禪時。先豎起脊梁骨。結跏趺坐。以右足安左膝上。左足安右膝上。半跏趺坐亦可。但以左足壓右足。次以右手安左足上。左掌安右掌上。以兩大拇指相拄。舌拄上腭。脣齒相著。耳與肩對。鼻與臍對。腰脊頭項骨節相拄。狀如浮屠。不得左傾右側。前躬後仰。目須微開。免致昏睡。便是坐禪規範之大抵也。詳如天台

止觀。圭峰脩証儀。嗜坐禪一輩。弁明物理。詳知用事。百發百中。直下承當。恰如因風吹火。用力不多。苟昧体用。失理事。則鬼家活計。勞而耕無功。

問曰。坐禪功德。與五度万行。優劣如何。

答曰。譬如一切川流江河諸水之中。海為第一。坐禪亦復如是。五度万行中最為深大。又。如土山黑山。小鉄冢山大鉄冢山。及七宝山衆山之中。須弥山為第一。此坐禪亦復如是。於五度万行中最為其上。又。如衆星之中。月天子最為第一。此坐禪亦復如是。於五度万行中最為照明。又。如日天子能除諸闇。此坐禪亦復如是。破一切不善之闇。又。如諸小王中。轉輪聖王最為第一。此坐禪亦復如是。於五度万行中最為其尊。又。如帝釈於三十三天中王。此坐禪亦復如是。諸行中王。又。如大梵天王一切衆生之父。此坐禪亦復如是。一切賢聖。學無學。及發菩薩心者之父。又。如一切凡夫中。須陀洹。斯陀含。阿那含。阿羅漢。辟子仙為第一。此坐禪亦復如此。一切如來諸行之中。最為第一。坐禪者。能救一切衆生。能離衆生苦惱。饒益衆生。充滿其願。如清涼池。能滿一切諸渴乏者。如寒者得火。如裸者得衣。如商人得主。如兒得母。如渡得船。如病得醫。如暗得燈。如貧得寶。此坐禪亦復如是。能令衆生離一切苦一切病。能解一切生死之縛。故円覺經曰。無礙清淨慧。皆依禪定。生。又古德曰。坐脫立亡。須憑定力。

問曰。詳說坐禪功力。

答曰。一座坐禪一座仙。一日坐禪一日仙。一生坐禪一生仙。所以何。坐禪之時。兩手結法界定印。兩脚趺坐。則身業之殺盜淫自除。閉口舌拄上腭。則口業之妄語謔語惡口兩舌自除。返照自

己_二離_三諸緣_一。則意業之貪瞋癡自除。三業清淨。便是当体即仏。万行之中。何行一時有_レ除_三滅_二十惡_一乎。以至。世間一切伎芸。不_レ以_レ定。則悉是失_レ度。一作一行。以_レ定無_レ不_レ成_レ之。

問曰。坐禅一行者。上古上根大智。脩_レ之成_レ道。所謂難行難解。濁世下根愚癡。念仏題号。易解易行。

答曰。中古以来。有_二唱道師_一。主張念仏題号。為_二正修_一。為_二正行_一。引_三導愚凡_一。願_二他土往生_一。覓_二心外正覺_一。嫌_二持戒_一。排_二禅定_一。随_二邪見坑_一。一盲引_三衆盲_一是也。

蓋試論_レ之。仏世天地日月与_二濁世天地日月_一一般。則仏世濁世衆生根幾亦復一般。仏經之中。説_二末法余經悉滅_一。有_二弥陀一經_一殘_上。又。説_二如来常恒説法不_二曾滅度_一。然則。金口之説一概不_レ可_レ論_レ之也。所謂。如_レ文解_レ義三世仏怨。涅槃經者如来最後教誡。而遺_二嘱末世四衆_一。言言句句。雖_二濁末世_一説_二修_一戒定慧_一。未_レ有_二曾一句末世念仏題号_一。時機相应之説_一也。又。坐禅称_二難解難行_一。因_レ未_レ知_二坐禅_一故有_二此惑_一。若能脩_二得坐禅_一。則坐禅還是易解易行。念仏題号難解難行。所以如何。念仏題号。手持_二念珠_一。口唱_二名号_一。对_二仏前_一行_レ之。向_二人前_一難_レ脩_レ之。坐禅工夫者。行住坐臥。念念脩_レ之。心心行_レ之。心中工夫故向_二人前_一易_レ脩。況是仏前静処乎。

問曰。念仏題号者。今生行_レ之。当来必往生成仏。縱今生作_二坐禅工夫_一。不_レ見性悟道。則未来当_レ墮_二惡道_一。

答曰。念仏題号未来往生成仏。坐禅觀法者即身成仏。何期_二未来_一。若有_二下根下智者_一。仮使参而未_レ徹。学而未_レ成。歷_二在耳根_一。永為_二道種_一。世世不_レ落_二惡趣_一。生生不_レ失_二人身_一。纔出頭来一聞千悟。世尊六年端坐。見明星悟道。初祖九年面壁。一華開五葉。諸仏諸

祖。顯密諸宗。悉是因_二坐禅_一成_二仏道_一。坐禅功德。以_二大海_一為_レ硯。以_二須弥_一為_レ筆。不_レ可_二書尽_一也。

この『坐禅論』は、潮音が撰述した翌年、即ち延宝七年（一六七九）初秋、江戸室町三丁目、戸島惣兵衛から刊行されている。一見して明らかなごとく潮音は、幽遠なる禅理について殊更に高揚せず、念仏や題目を引合いに出して禅の優勝なる理由と、より易行なる旨を述べ、「世間の一切の伎芸も、定をもつてせざるときは悉く是れ度を失す」と説いて、具体的にその門戸を開放している。永平道元の『普勸坐禅儀』には、とうてい比肩すべくもない格調の低さであるが、それだけに、市井の一般士庶には、受け容れられ易かったのである。潮音の意図も勿論そこにある。

『坐禅論』を撰したのは、潮音五十一歳の時である。これよりさき、寛文六年（一六六六）三十九歳の潮音は、土井大炊頭夫人良岳寿春大姉のために法要を説示し、これを一書として上梓した。名づけて『霧海南針』という。潮音はその序に、「前仏はすでに去、後仏はいまだ世に出ず。此二中間に、一切衆生邪見の霧海にまよひたゞよへり。此故に四弘六度の磁石の針をあたへて、指南して覺岸にいたらしめんとす」とのべている。これによっても知られるごとく、「霧海」とは仏法の闇昧になったことをいい、「南針」とは、それゆえ「道」

に行き暮れて、無明の闇路に漂溺する人々を救護するための指針であるというのである。序にいつている如く本書は、四弘誓願と六度の一一について開示したものであるが、「禅定」を説く段に彼は、禅の病弊を難じて

此国二百年来、禅家济洞の二宗、日本の古徳祖師の公案に、平話著語など付をきたるを取あつめて、是を参則と定て、碧前百則、碧巖百則、碧後百則、此三百則をかぞへて、破参大悟と号して、行巻袋、密参箱に収て、是を一大事因縁とおもへり。若此行巻袋、密参の箱火事に逢、或は水にながしたらば、一大事因縁悉く一時に滅却すべし。此かぞへ参を教る長老の中にも、多聞博学の人有共、名利高慢の心にさへられて、是をあやまりと見てやぶるほどの人もなし。ただ鳶鳥の死たる鼠を取て秘藏するにおなじ。是ハ余が悪口を申にては少もなし。仏経祖録の中に先徳のいましめし亘也。よくく眼を入て見給ふべし。此著語平話の意も一円了解し得ず、唯古徳の付をきたるを、漸師家やまに本分の句、又現成の句と教られて、云あててをくばかり也。児童のなぞなどをとく様に覚侍る故に、自己の本心ハくらくらして、破参したる智識長老の行作も、愚俗にかはる所なし。あまつさへ法慢をして諸宗をあなたどり、正法を誹謗す。このゆへに二百年以来、禅の灯消て、正眼の人尅箇半ケもなし。此かぞへ参ハ、大徳寺養叟よりはじまりたと見えたり。一休の自誠集と云もの有、是ハかぞへ参をしかりたる事也。今時、かぞへ参を教る智識長老も、此かぞへ古則、いづれの世に誰人の仕出したると云事をだにしらずして、是を仕すまされば、破参して出世長老に成がたしと斗ばかり思ひて、何の利益有

共しらざる也。

といひ

衆寮江湖とて、多くの学者をあつめて、此かぞへ古則を教て、光陰をむなくおわらするを、智識とやいはん、外道とやいはんと痛罵している。

潮音が公案禅に對して、批判的であり否定的であつたことは、その大著『指月夜話』に「不興公案」と題して

徳山曰く、我宗に語句無く一法の人に与ふる無しと、臨済曰く、手上に出で来れば手上に打し、口裡に出で来れば口裡に打すと。唐朝の古徳多く是れ此の如し。一法を与へずして觀面直截なり。然るに宋朝以来の諸善知識は、学者に死話頭を与へて工夫提撕せしむ。漸く明朝に到りて、密雲、貴隱の二大老出頭来し、此の弊を改め、单提直指す。吾が本朝は宋朝よりこのかた、和僧宋朝に入り、宋僧和朝に入り、また公案提撕を以てし、家風を倣つて緊く執持す。頃ろ吾が隱祖翁朝に入り、公案提撕を以てせず、单刀直入、作仏作祖し去らしむ。謂つべし、少林万古の春を挽回する者なりと。(原漢文)

と述べていることに徴しても明らかである。彼はまた「露海南針」に、蒙昧の禅人を評し、その有様を弾じて

又不立文字の宗ハ、座禅戒律念仏等ハなき物のやうに思ひて、座禅戒律念仏する人をわらひて、自分のさとりは即心即仏と心得て、此見聞の主を認り。是ハ外道禅我の見也。又座禅して一念もおこらざるところを、本来の面目と思ひて自慢するもの有。是ハ默照邪禅也。

といっている。以上によって、概ね潮音の時弊に対する態度と、その禅風の大概を推度しうるように思われるが、同書に心要を開示して

ただ即今見聞の主へなにもものぞと工夫をくだすべし。この見る主、きく主を、行住座臥の内によく／＼眼を付て見べし。工夫一片になる時へ、行に行夏をワすれ、住するに住する事を忘れ、座するに座を忘れ、臥す時に臥をワするもの也。か様に疑團一味になる時へ、心身共に鉄壁をつき立たるがごとし。かゝる時に一念なり共悟をまち、又工夫一片になりたるとおもふ念おこるへ、大成病也。たゞ有とも無とも思はず、思慮分別一点もわかざる時、気ある死人の様に成て、大疑忽に破れて、自己の主人公を徹見すべし

と述べているところを見ると、潮音は死話頭に墮した公案と、その流行ないし受容の仕方について排斥論難したのであって、その宗風と唱道の特殊なるにもかかわらず、本質的には済家と同根の立場に在るように思われる。『指月夜話』に潮音は、長蘆宗蹟の『坐禅儀』の、「念起らば即ち覺せよ。これを覺すれば即ち失す。久久に縁を忘ずれば、自ら打成一片と成る。これ坐禅の要術なり」という文を引いて、「往々に坐禅工夫の輩は、容易に看過して事と為さずして、一片の疑團を以て要術と為す。是の故に十年五歳、自心を發明する能はずして退菩提心を生ず。冀くは後学の工夫坐禅せんと欲する人は、須らく念起即覺を要すべし」といっているが、長

蘆の坐禅に関する宗要は、既に永平道元により、「略有二多端之錯、広有ニ昧没之失」(『普勸坐禅儀撰述由来』)と否定超克せられている。此れによって是れをみれば、その帰趨は自ら分明であるという他はない。

損翁も話頭を弄する看話の禅を批判して、「徒らに大疑大悟、小悟小悟を荷うて空しく光陰を費す、痛むべき哉」といい、「彼の公案を提撕するは後人の私案なり、豈に仏祖正伝に比して論ずべけんや。然れども知る者鮮し。悲しむべし」(『宝永記』)と嘆じているが、その嘆きは、潮音のそれと決して等質ではない。

永平道元は『正法眼蔵坐禅箴』において、破格の筆尖を振って宏智正覚(一〇九一—一二五七)を賞揚しているが、損翁もまた

宏智禅師は光前絶後の大善知識か。永平祖師、詞を窮めて讃歎す。その讃歎する所以は、禅師、坐禅箴を作りて云く、仏仏の要機、祖祖の機要と。但だ箇の二言八字、西天にも未だ有らず、東土にもまた無し。この義は則ち有り、この言は則ち有ることなし。初めて宏智の舌頭に発するのみ。この故に、永平これを慕ふて、また箴を作る。支那四百州、日本六十余州、未だ比類を見ず。我等生涯謹奉す、実に曠劫多生の宿殖善根か。汝等後生、努力めて此の旨を主張すべし。(『宝永記』)

と、讃揚と崇敬の赤心を吐露している。

損翁は宏智の『坐禅箴』について、若干の覚え書を遺して

いるが、そこに損翁自身の宗教的世界と、その宗要の巧まざる披瀝をみることが出来る。

以下に、「永平正法眼藏坐禅箴損翁和尚弁話」と簽題のある「覚え書」の全文を掲げてみよう。

夫、我門ニナセル所ノ坐禅ト云フハ、釈迦牟尼如来ヨリ迦葉尊者ニ伝ヘ、ソレヨリ嫡嫡正伝シテ、三十六代薬山禅師ニ至ル。上ミヘ三十六代ニ釈迦牟尼如来アリ。是ヲ名ケテ、仏仏祖祖伝授ノ法門ト云フナリ。上ニハ仏モミヘズ、下ニハ衆生モナキ所ヲイヘルナリ。是ヲ今日ノ坐禅トス。コノ坐禅ノ理ハ、如来在世ノ諸ノ經論ニモ説セラレザル事ナリ。是ヲタトヘテイフニ、小枝ノ本ニ大フ根アリ、大根ノ本ニ小枝ナキガ如シ。諸ノ經説ハ枝ノ如ク、此ノ坐禅ハ根ノ如シ。愚ナル者ノイヘルニハ、此ノゴロ坐禅功夫シテ、無事ナル事ヲ得、中心安ク、身モ静ニナリ已リヌトイヘリ。此言今時モイフ事ナリ。是皆実ヲシラヌ者ノ言ニテ、三毒ヲ離レテ、清浄ニナラント思フ。学者ノ言ニアラズ。此ノ事ヲナゲキ玉ヒテ、モツタヒナクモ、仏祖伝法ハタヘタリトノタマヒシナリ。其ノ心得ハ何ゾ。ツトメズシテ、カナハヌ事ヲ仕果シテ、今ヨリ隙ニナリシト云フガ如シ。此ノ坐禅トイフハ、仏仏ノ坐ヲ移シテ坐スルユヘ、初モナク終モナシ。然ルニ、今時ノ坐禅ハ、悟ラン為バカリニシテ、悟テヨリハ隙ニナリシト思フ。是誤レル所ナリ。仏ノ勤トイフハ、ヤム事ハナキモノナリ。仏道ヲ成就セント思ハズ、成就セヌモノナリト知ルベシ。是ヲ以テ彼ヲナシ、彼ヲ以テ是ヲナスト云フ事ナシ。從來ノ仏ヨリ、今日面面境界ノ手ノツカヌ所ヲ、拈ジ来テ坐蒲団トナシテ、是ヲ思フテ是ヲ勤

メ、安穩不安穩トイフ事モナキナリ。又、愚者ノイヘルニハ、坐禅弁道ハ、初心者ノ勤ムル所ナリ、仏仏祖祖ノ全ク勤ムルモノニアラジト思フ。永嘉真覺大師ノ、行住坐臥、語默動靜、共ニ皆坐禅ナリトノタマヒシハ、法ノ上ヘノ離レヌ所ヲシメサセタマフナリ。是ヲ坐禅トシテミルハ誤リナリ。此ノ坐禅トイフハ、血脈不断ノ坐ナリ。仏モミヘズ、師モナク、一切平等ノ坐ト知ルベシ。是ヲシラズシテ、坐禅ハ初心者ノスル所ト思フハ、誠ノ坐ヲシラヌユヘナリ。弥陀如来モ、釈迦如来モ、皆ナ常ニ坐禅ナリ。然ルニ仏道ニテ、何者ヲカ初心者トイフベキ。何レモ皆同ジ仏事三昧ナリ。不捨一法ナリ。諸芸ノ上ニこそ、初心功者モ有ベキニ。仏道ニハサナシ。初心ニ非ズトイフ者有ベカラズ。法トイフハ、少シズツモ契フホド、イクヂノフ見ユル事ナリ。仏道ヲ学スル者ハ、坐禅弁道ヲ専ラニセネバ、仏ニハイタラヌナリ。坐禅ハタダ今日ノ境界ノ、手ノツカヌ所ヲ察スルナリ。其ノ目アテニハ、仏ニナルベキトノ旨ナク勤ムルナリ。仏ニナラントノ旨ニテツトムル時ハ、我身ヲ凡夫ニ落ツケテ、凡夫ニナルユヘナリ。凡夫ヲ今ノ因トシテハ、仏ニ至ル事ハ有ベカラズ。タトヘバ、瓜ヲ取ラントテ、ナスビヲタネトスレバ、瓜ハナラズシテ、幾年モ茄子バカリ実ルナリ。何ゾノ勤ヲナシテ、助カリタシト思フハ、皆是凡夫行トイフモノナリ。是ニテ仏ニ成事有ベカラズ。仏ヲ求メズシテ、仏ニ至ルヲ坐禅トイフナリ。今日ノ修行ニ、何ニヤラヲ捨テ、何ゾヲトルトイフハ、皆皆仏行ニ非ズ。タトヘバ、迷ヲ離レテ悟リニ至リタク思ヒ、生死ヲ離レテ涅槃ニ入タク思フガ、此ノタグヒナリ。生死ヲキラハズ、涅槃ヲ願ハズ、悟ヲ求メズ、迷ヒヲキラハズ、衆生ヲ捨ズ、仏ヲ求メザルヲ、坐蒲団トシテ居ル

ヲ、仏祖ノ坐禪トイフナリ。諸法ハ夢幻空華ノ如ク、無住ニシテ、須臾モトドマラザレバ、一毫ノ取ベキ事モナク、又捨ベキ事モナシ。寢テモサメテモ、カクノ如ク坐スベシ。是ヲ作仏ヲ求メザルニ、成仏ノ人トイフナリ。サテ又、羅籠打破ノ時節アリ。悟ガ悟トナリ、仏ガ仏トナル。悟ヲ求メズシテ悟ニ至リ、仏ヲ求メズシテ仏ニ至ル。是ヲ名ヅケテ、意根截斷、維範打破トイフナリ。是マデ藥山禪師公案ノ終リナリ。

今マデハ、湖南ノ上ニテ明シタマフナリ。湖南ト江西ト、両所ニ禪ノ分カリシナリ。ヤウヅ川ノワタリナリ。江西トイフハ、今ノ臨濟宗ノ寺ナリ。祖師ハ南嶽禪師、六祖ノ弟子ナリ。南嶽禪師ノ弟子ニ、大寂禪師トイフ人アリ。常ニ坐禪ヲ勤テ怠タル事ナシ。アル時、南嶽禪師、大寂禪師ノ所へ来リテ問玉フ。汝ハ坐禪シテ何ヲカハカルトノタマヒシナリ。此言ヲ親切ニ味フベシ。坐禪シテ居ルヲ見テ、何ヲカハカルトノタマヘバ、ムカフニ何事カ別テ、思ヒハカル事ノ有ルヤウニ見ユルナリ。仏門ニハ、坐禪ヨリ外ニ何事モハカル事ナシ。世ノ中ニハ、坐禪シテハ、何事カ案ズル事ト思フナリ。是皆誤リナリ。今マ何ヲカハカルトノタマヒシハ、何事モナシトイフ事カ。是ヲ禪定ト見ルカ。此ノ意ヲカンガヘ見ルベシ。

此ノ坐禪ハ思フベキ事ノナキヲ思ハカル。是ヲ坐禪トイフナリ。遠キ所ヲ貴シ好シト思フベカラズ。又賤シトモ思ベカラズ。唯ダ遠キヲモ疎カラズ、シタシマズ、遠キニナレトナリ。近キヲモ貴シ好シト思ベカラズ。賤シトモスベカラズ。是ヲ遠ザケズ、親シマズナラヘトナリ。タトヘバ柳ヲ見ルニ、見事ナリトバカリ見ルベカラズ。只是ヲモ見ナラフベシ。鳥ノ音ヲ聞テモ樂ミトバカ

リ聞事ナカレ。賤シトモ聞事ナカレ。タダキキナラフベシ。這裏ニハ、シヒテ好ムベキ理モナク、亦嫌フベキ事モナシ。是ヲ思ヒハカルニ、真ニヲヒテ真モナク、偽トイフニ偽モナク、一切ノ名目ヲ離レタリ。是ノ故ニ、常ニ物ヲ見ルニ、目ヲ重クシテ見ル事ナカレ。重フシテミレバ、其ノ物ニ著スルナリ。又輕クモ見ベカラズ。輕クミレバ、イカヤウトイフ見定メナキナリ。耳ニ物ヲ聞事モカクノ如ク聞クベシ。カクノ如クナレバ、見ル事明カニ、聞事聰ナリ。是ヲ聰明ニ至ルトイフナリ。此事ヲ、何ヲカハカルト問タマフナリ。大寂禪師ノ答ニイハク、作仏ヲ^{ハカル}答ヘタマフナリ。此ノ坐禪ニテ、仏ニナラント思フトイフ意ナリ。是ハ仏ニ仏ニセラルル法カ、仏ヲ仏ニセントノ法カ。仏ニ仏ニセラルルトハ、今日ノ身ノ善惡共ニキハマラズ、手ノツカヌ所ヲ、了簡ヲ入レズ勤メテ居レバ、仏ノ境界ニテ、仏ニ仏ニセラレタルナリ。是ヲ誠ノ仏道トイヘリ。私ヲ離レタル事ナリ。シカルニ、人人仏道ニ入テモ、仏ニ成タシト思ヒテ勤ムルユヘニ、仏ニ成ベキ事ヲアテスルノ誤リアリ。只人ノ身ノ、善惡トモニ何トモ手ノツカヌ所ヲ、其ノママニ勤テ居テ、己レヲ離レタルハ、實ニ仏ニ勤メラレタルナリ。私ヲナストイフハ、タトヘバ、冬ハ足ガゴゴユルユヘ、坐禪バカリシテ、經行ヲミジカクシ、夏ハ暑ク、蚊ナドアルユエニ、坐禪ヲミジカク、經行ヲ長クツトムルハ、是皆仏行ヲ自ラアテガフテ、私ノ行ニコシラヘアラタムルナリ。坐禪ハ、線香三炷セバ、經行モ三本ナシテ、同じニ勤メテ、出ル息入ル息ノ如クナルベシ。己レヲ離ルルハ、仏ニ仏ニセラルルナリ。

又仏ヲ仏ニセントハ、今日ノ人ノ身ノ上ニヲヒテ、手ノツカヌ所、スナハチ仏ナレドモ、仏ナレバトテ、手ヲツケズ、勤ズシテ

居テハ、仏ニ成ベキ業ナケレバ、手ノツカヌ了簡ノ外ノ所ヲ、仏ノ勤ニツトメテ、新タニ仏ヲ仏ニナス事カ。ソノ作仏ガ数多フシテ、何レトモ落ツケラレズ、マガフ所ガ作仏ニ有ベキカ。坐禅カナラズ作仏ノ境界ナリ。図作仏ノ図ハ、坐禅イマダセザル、ムカシノ事ヲ思ヒハカルユヘニ前ノ事カ。又此ノ身ノ後ノ事ヲハカルユヘ、作仏ヨリ後ノ事カ。此ノ時、皆共ニ作仏ニ成事ナリ。何ヲカハカルトイフ事ヲバ、坐禅シテハ、何ヲカハカルト心得ベシ。何ヲ思フトイフニモナク、何ヲ思ハヌトイフニモ非ズ。只朝ヨリ夕ベニ至マデ、坐禅ノ形チハ、何ヲカハカルトイフ事ナリ。世ノ中ノ言葉ニモ、免角シテナドトイフ事モ定マラヌ事ナリ。免角トイフハ、ウサギノ角トイヘル文字ナリ。免ニ角ノハヘルトイフ事ハナケレドモ、落ツキ定マラヌ事ノ世話ナリ。何ヲカハカルトイヘルガ、則チイハユル図作仏ノ事ナリ。仏ニ仏ニセラルルモ、仏ヲ仏ニスルトコロモ、皆皆仏ヲ仏ニスル所ノ勤也。

仏仏要機、祖祖機要、不触事而知、

此ノ箴ハ、宏智禪師ノエラビタマフナリ。要機機要共ニ、カナメトイフテ、肝要ノ事ナリ。坐禅トイフハ、初モナク終モナク、迷ナケレバ悟ルベキ事モナシ。是故ニ、取ル事モケナケレバ、捨ル事モナシ。サレバ今日ノ身ノ上ノ思ヒデニ、善モ始終ナク、惡モ始終ナシ。善惡不二ナレバ、善惡ニアヅカラズ、亦、善惡ヲ嫌ハズ、善惡共ニ取リモセズ、捨モセズ。寢テモ起テモ、只カクノ如シ。草木モ、春夏秋冬ノ四時ニ移リカハリテ、イツヲ始メトシ、イツヲ終リトイフベキ事モナシ。一ヨリ十二イタリ、又タ一ニカヘルガ如シ。陰陽モ、年ノ中ニ陽始リテ陰キヘ、陽ノ中ヨリ陰ヲコリ、陰ノ中ヨリ陽生ジテ、イツレヲ始メ、イツヲ終リトモ

ナシ。草木ノ上モ、イツヲ成就トイフ事モナシ。華咲シヲモ成就トモイハレズ、実ノリシヲモ成就ニ非ズ。春ハ花サキ、夏ハチリ、秋ハ実ノリ、冬ハヲガレニ似タレドモ、四時トドマリナク循環スレバ、草木ノ上モサダマラズ、始終ナシ。花ノ開ク中ニモ落花ノ氣ザシアリ、落花ノ中ニモ花ノ開クルコロアリテ、何トモ始マリトモ終リトモ、手ノツケラレト事ナリ。何レガ始メ、何レガ終リトイフ事モ、キハホトリナク、シレヌ事ナリ。旅人ノ道中セシモ、右足ガ始メカ左足ガ始メカ、彼レトモ是レトモシラレヌナリ。是レヲ以テシルベシ。從來ヨリ迷ナケレバ、悟ルベキモノナシ。衆生ト名ヅクベキ者ナケレバ、仏トイフベキ事モナシ。コノユヘニ、成仏不成仏ノ名モナシ。カクノ如クナレバ、誰レカ凡聖ニワタランヤ。況ヤ凡聖ノ境界ニトドマランヤ。少シモ背ク時ハ、大ヒナル迷トナレリ。今日ノ境界ニソムク時ハ、少シトイヘドモ天地懸隔ノタガヒニ及ブナリ。少シモ了簡ヲ入ズ、今日ノ如クニ勤ムルナリ。此ノ位ニ至リ得ントオモハバ、坐禅ヨリ速カナルハナシ。

仏仏祖祖共ニ肝要トセシハ坐禅ナリ。是故ニ、釈迦牟尼仏モ六年ノ坐禅ヲ肝要トシタマヒ、達磨大師モ九年ノ坐禅ヲ肝要トシタマフ。是レ利鈍賢愚ヲエラマズ、内外相応ナルガ故ニ、衆生ノタメニ、カクノ如クシメサセタマフナリ。静所ニ在リテ、手ヲクミ足ヲ重ネ、目ヲ半眼ニナシ、左リニヨラズ右ニカタムカズシテ、或ハ結跏趺坐、或ハ半跏趺坐ニシテ、卒都婆ヲ立タルガ如クシテ坐スベシ。コレニ病ノ出デヌヤウニスル事ハ、一切ノ理ニ触レズシテ知ルベシ。タトヘバ目ノ前ノ草木ヲ見テ、是レハカヤウノ木ト定テ見ル、ソノ時ハ是ニサハリ、又タ是レニモナキゾト見レバ、

落ツキテナキニサハル。サハラズシテ其ノ理ヲ知ルトイフハ、有
トモ無トモ落ツカヌ所ヲ知ル時ハ、表ヨリ裏マデ、スキトヲリタ
ル如クニ知ル事ナリ。然ルニ、一切ノ境界ニ明ラカナラヌユヘ、
是非ヲツケ、了簡ヲナスナリ。万物万事、皆是今日ノ心ノ如クノ

モノナレバ、万法疑ヒナク、了簡分別スベキ事ナシ。有トモ無ト
モキハマリナク、シレヌハ万法ノ上トモニカクノ如シ。然ルニ、
浅間敷貪著シテ善事トイヒ、惡事ト思ヒ、嫌ヒ好ミ、生ト愛シ、
死ト憎ムナリ。明ラカナル在所ハ、イトカスカニシテ、見トドク
ベキ色モナシ。本ヨリ平等ノ色ノアレドモ、コレトモ知ラヌモノ
ナリ。常ニ一切ノ法ノ何シノ相トモキハマラズ、ナニノ色トモ見
ヘ分カズ、ナニトナリトモ落ツカヌ所ヲ肝要ト決定スベシ。シカ
アレバ、見ル事、聞ク事、味フ事、思フ事、縁ニ触ズシテ照スト
コロノ光明、オノヅカラ明白タリ。煩惱ナク、安樂ノ勤トハ是ヲ
イフナリ。水清フシテ、魚ノ朝ヨリ晩ニ至ルマデ、エヒエヒトシ
テオヨゲドモ、イツヲカギリトイフ事モナシ。又タ大空ニ限りナ
ケレバ、鳥ノ飛ニイツ飛ビ終ルトイフ事モナシ。其ノ如ク坐禪
モ、法界ノ水ノ如ク空ノ如クニテ、限りナキ所ニ居リテ、キハマ
リナキ勤ヲナセリ。彼トナリトモ、是トナリトモ、ユキトドマル
所アレバ、成仏ノ因ヲ失フナリ。魚ヤ鳥モ、オヨギヲハリ、飛ビ
ヲハレバ、死スルガ如シ。父母未生以前トイヘルモ、コノ心ヲ知
ル事ナリ。是則チ仏ノ要機、祖祖ノ機要ナリ。事ニ触ズシテ知
ルトイフハ是也。

不レ対レ縁而照ストハ、照ノ縁ヲ化スハ衆生ノ心ナリ。タトヘバ松
ヲ見ルニ、是ハ松ゾト落ツケテ見レバ背クナリ。是レモホトリヲ
離レタリ、彼レモホトリヲ離ルト見ルハ一理アレドモ、照ノ縁ヲ

化セザル所モアリ。山万歳トサケブ事モアリ。サリナガラ、山川
モ我が如クナラント思フベカラズ。各各ノ分量アリ。有トモ無ト
モ、ホトリノ知レヌ目ヨリ見ル。ソノ時ハ、自ラ諸縁ニ対セズシ
テ照スナリ。

水清徹底令、魚行遲遲、

水モホトリモナク、空ナル水ヲ清シトイフ。此ノ水ニ遊ブ魚ハ、
行ク事何方ヘモ行定マラズ。浮ベドモ上ヘモナク、沈メドモ底モ
ナシ。コレ法界ノ姿カクノ如シ。坐禪ヲナスニモ、魚ノ行ク如
ク、幾ク万里トイフ事ノキハマラヌ如クスベシ。大空モ法界ノ如
シ。是ニ飛ブ鳥ハ、飛ンデ飛バザルガ如シ。畢竟イフトキンバ、
大空ノ飛時、鳥モ飛ト心得ベシ。此ノ心ヨクヨク味フベシ。不思
量ノ所ハ、縁ニ対セザル所ナリ。手ノツカヌ焼ケ石ノ如ク、火焰
裏ノ如シ。少モ分別ヲ入レ、手ヲツクル時ハ、全体ヲ焼却スルナ
リ。縁ニ対セズシテ照ストハ、不思議ニシテ思量スル事ナリ。無
分別ノ知ナリ。草木人畜共ニ分ケテ見ルハ非ナリ。又タ同ジト見
ルモ誤リナリ。虚モナク実モナク、何事モ皆ナ虚ニシテ、又タ実
ナリ。虚実共ニ定メナキナリ。定メナキハ今日ノ心ナリ。定メナ
キハ今日ノ身ナリ。定メナキハ今日ノ世界ナリ。定メナキコソ、
世ハオモシロシト、人モイイシナリ。水清ハ大法ニタトヘ、魚ノ
修行ノ人ニタトフナリ。夜ルヨリ夜ニ至ルマデ、魚ノ水ニ遊ブガ
如ク、修行者モ、勤ノ時バカリ勤ト思ハズ、寢テモサメテモ、タ
ヘマナク、ホトリノミヘヌ、手ノツケラレヌ、理ノキハマラヌ所
ニ遊ブベシ。

サテ又タ、坐禪ニ懈怠セヌ事ナリ。坐禪ハ行者ノ平生ナリ。退屈
心ヲ生ズルハ、私ノ心ナリ。坐禪ハ安樂ノ法門ニテ、タチマチ身

心安寧ニ至ルトイヘドモ、尋常散乱ノ境ニバカリ居ルユヘニ、退屈ノ心出ルナリ。坐禪ハ行者ノ常ニテ、遊戲三昧ノ所ナリ。坐禪トアラタメ見ルヨリ、退屈出ルナリ。一切ノ有為ヲ捨カネテ、坐禪ノ無為ノ都ニハ入カヌルナリ。此ノ甚深ノ大法ヲ見ズ知ラザル輩ハ、悟ニクラミ、悟タルトテ坐禪ヲ捨テ、アマツサヘ世界ヲモ非ニ見ルナリ。カヤウノヤカラハ、カヘツテ悟ラザル已前ニモヲトレリ。又タハ悟ラレヌトテ、イロイロニ身ヲ持ツユヘニ、分別モ定マラズ、終ニ退屈ヲ生ジ、昔シノ勤シ事ヲ我が大功ト思ヒ、イタヅラニ、月日ヲ暮ス人モアリ。畢竟此等ノヤカラハ、坐禪ノ坐禪ナル、有難キ事ヲ知ラザルノミナラズ、坐禪ノ大旨ヲ少シモ聞ザルユヘナリ。誠ニ哀ムベシ。モシマタ病身老衰ナドニテ怠ルトモ、有難フシテ、サシヲカレヌ事ヲ知ラバ、分ニ応ジテ坐禪アルベシ。道理ノミガテンシ、弁ズルトイヘドモ、畢竟我が物ニセヌユヘニ勤カヌルナリ。実ハ弁ニモ述ラレヌモノナリ。只ホトリノミバカリ、アレコレトイフノミナリ。メヅラシキ事ニ非ズ。二祖大師、達磨大師ニ対シテ何事モノタマハズ。又手ノ所ヲカンガフベシ。其時、達磨大師即チ大法ヲ伝ヘタマフナリ。達磨大師モ唐土ヘ渡リタマヘドモ、何事モノタマハズ、九年面壁坐禪ナリ。其流レヲクム人、坐禪ヲ知ラズ行ナハヌハ、仏心宗ノ末派ニ非ズ。天童如浄禪師モ、看經礼拝ヲ要セズ、只管坐禪セヨトノタマヒシナリ。大寺名僧^(ママ)ノ住職トシテ、坐禪ヲ行ナハヌハ、祖師ノ御心ニモソムクベキナリ。慈悲為人ノ心ナキノミナラズ、仏心宗ヲ相續セヌナリ。末世ノ失ナリ。コノユヘニ、心有ル者ハ庵リニ身ヲ安スンズルナリ。知音稀レナリトイイシハゲニゾカシ。アマツサヘ、坐禪スルヲ見テハ、イロイロニ誹謗ナドスルハ、誠ニ大罪

ナルベシ。仏ノ言ハク、二人ノ非人アリ。一人ハ三千大千世界ノ衆生ヲ殺ス。一人ハ坐禪ノ人ヲ罵謗ス。二人ノ罪イヅレカ重キ。坐禪ノ人ヲ毀謗スレバ、三千大千世界ノ衆生ヲ殺ス者ヨリモ勝レタリト。ハカリ知リヌ、坐禪ノ功德、マコトニ不可思議ナル事ヲ。然レバ実ノ人ナラバ、坐禪スルヲ見テハ、礼拝恭敬シ、隨喜シ讚歎スベキナリ。コノユヘニ、馬祖大師ハ、大梅禪師ノ山奥ニ独リ庵リヲムスンデ坐禪セシヲ見テ、馬祖大師ミヅカラ山奥ヘワケ入り、大梅禪師ノ髪ヲソラセタマフナリ。馬祖大師ノ御志シ、誠ニ有難キ事ナリ。仏心宗ヲ知ルモノハ、皆カクノ如シ。仏心宗ヲ行ヒ相續スルトイフハ、カクノ如シ。仏心宗ノ鏡ニスベキナリ。モシ身ニ行ナハレズバ、是ヲ知テ忘スル事ナカレ。草モ草ニ似、人モ人ニ以テ、似タリ似タリニシテ、彼レニモ是ニモ実ニキハマラヌナリ。迷ヒモカクノ如クナレドモ、迷ノアヒダニテハ、是レ男、是レ女、是レハ白ク、是レハ黒シト、キハメテ見ルノ誤リナリ。如來トイフ事モ、キハメヌ事ナリ。如ニ來ルトイフテ、アノ如クコノ如クトテ、是皆如ノ所ナリ。如ノ上ガ誠ナリ。キハマラヌ如ノ誠ヲシラヌユヘ、何ヤラ落ツケキハムルナリ。此ノ誠ニヨリテ修行スルヲ、法体トイイ、出家トイフナリ。ソレニ何カト道理ヲツケテ、悟リトイイ迷トイフヲ、是ヲ在家ノ凡俗トイフナリ。法界ノホトリナキヲ目アテトシテ、勤ムルユヘ、我が方モコノ如ク、ムカフノカタモアノ如ク、如ク如クノ本体ナリ。コノ如ノ如ノ本体ニ叶ヘバ、此ノ身今日、^(ママ)境界ニシテ、直ニ凡聖迷悟ヲ超越スルナリ。此旨ヲ仏祖祖、秘密藏トナシテ、展轉授受シタマフ所ナリ。是ヲ坐禪ノ面目骨髓トスルナリ。（統曹全・注解二）

潮音の『坐禪論』は、漢文体であるにもかかわらず、齒切れよく明快であり、士庶を誘引し大衆を接化するには好箇の便宜がある。これに対して損翁の『弁話』は、和文であり卑近な素材を例証として挙げ、諄諄乎として説示しているにもかかわらず、士庶大衆の側に即諸首肯せしめる契機に乏しい。このことを仮りに渡河に譬えていえば、潮音の「坐禪論」は、対岸に渡了するまで河底の沙礫を踏むに似ているが、損翁の『弁話』は、頭初より踏むべき沙礫の存在しないのに似ている。踏むべき沙礫のないということは、河底がないということである。潮音の『坐禪論』が、洸洸たる生死の急流に抗して、遙かに覚岸をのぞむ渡河の法であるとすれば、損翁の『弁話』は、無底の足下に覚岸をも滅した悠久の法であるということができるであろう。もし損翁の『弁話』を看て一分の当惑があるとすれば、それは自己自身が、生生世世を尽しても、とうてい免れ得ないであろうところの、人間性そのものにおける無限の当惑であるといつてよいのではありますまいか。

仙台大年寺の鳳山は、潮音の嗣徒であったが、その所持する『信心銘』の註について彼は、「是れ山僧が臆談に非ず、潮音先師の示誨に由るのみ」といった。面山は「極小同大、極大同小」という語の下に鳳山が、「極小同大、空即是色、極大同小、色即是空」と註せるのを挙げて、その本旨を損

翁に質すと、損翁は、「大を談すれば色空共に大なり、小を談すれば色空共に小なり。鳳山、空を以て小となし、色を以て大となす、未だ情見を免れず。若し、能く高く眼を極の一字に著くるときは、大小自ら脱落すべきのみ」と評した。損翁の択法眼の前に潮音は、やはり一隻眼を欠くものであったといつてよいであろう。

六

損翁の、日日接化提撕の様子について面山は、次のように紹介している。

師、毎月二に逢ふて之れを坐禪の日と定め、在家の有信を誘ふ。常に四十人ばかり来り集り、打坐して粥後より午前に至る。飯後に開示あり。或は永平正法眼蔵、諸大乘經の要文等なり。大衆のためにするときは、則ちまた毎日、晩参あり。開示する所は、般若の讚、信心銘、証道歌、宝鏡三昧、参同契、永平広録、洞上古轍、臨濟録等なり。また二時の布薩あり。真俗雲集す。梵網罷に開示あり、金剛經、法華、楞嚴、起信論等なり。皆な本文を解説して註釈を用ひず。或時、戯れに言く。但だ仏作祖作は則ち好し、人作は則ち好からず。古今、註釈の本文を害することや、勝^あげて計ふべからず。所以に、山僧が解説する所は、みな達磨の註を用ひるなり。昔、梁の武帝、聖諦第一義を挙す。達磨註して云く、廓然無聖と、皆な此の格なりと。言ひ訖りて大笑す。『宝永記』

されば、損翁が講經するとき、浅から深へ麤から細へという瑣々たる論脈は存しない。『法華經』を開示する次で損翁は次の如きいう。

法華は一代藏教の頂額なり。是の故に諸仏出世の本懐といふ。註釈最も多しと雖も、唯だ題号を解すれば、八軸余ることなし。汝等諦聴せよ。妙は是れ法を歎ずるの辞、法は是れ衆生の心法なり。蓮華は心法を示すの喩へなり。この心法の、蓮華の如くなるを信解せば、是れを仏知見と名づく。仏知見は乃ち一大事因縁なり。夫れ縁と事とは淤泥の如し。縁に対せず、事に触れざる底の光明は、則ち蓮華の如し。蓮華豈に淤泥のために汚されんや。然れども淤泥に非れば蓮を生ぜず。また須らく淤泥を全ふして是れ蓮、蓮を全ふして是れ淤泥なるの道理あることを知るべし。この道理を詮するを經と名づくるのみ。唯だ、仏祖正伝の蒲団に安住する時、一大事因縁、徧界曾て藏さず。汝等、宜しく是くの如く信受奉行すべし。〔宝永記〕

また『般若心經』を談じては、

この經は三百字に足らずして、六百軸の要機を括尽す。しかも仏の舌頭は、長も長に非ず、短も短にあらず。略も略に非ず、広も広に非ず、片言もまた十方を尽す。大千の經卷なりと雖も、また唯だ一句に在らば、文の広略、字の多少を以て如何と論ずべからず。刹那も之を修証するに至るときんば、直に大火聚の如く、虚空の虚空に住せざるが如く、豈に毫髪も元字脚を存せんや。是の故に、文字般若は要機に非ず、不立文字なる所以なり。実相般若は是れ仏向上の事なれば且らく置く。但だ、觀照般若は是れ仏祖の

要機なるのみ。經に云ふ、觀自在菩薩、深般若波羅蜜多を行ずる時、五蘊皆空なりと照見して、一切の苦厄を度したもふとは即ち是れなり。觀照は即ち行、行は即ち修証、修証は即ち、事に触れずして知り、縁に対せずして照すなり。便ち是れ、仏の要機、祖祖の機要なり。直に実相般若と同契す。この要機を得る底の人は、龜言細語、皆な第一義に歸す。是れを文字般若といふ。この故に説く、菩提薩埵は般若に依るが故に、心に罣礙なし。三世の諸仏は般若に依るが故に、阿耨菩提を得たまへり。是れ大神呪なり、是れ大明呪なり、是れ無上呪なり、是れ無等等呪なりと。呪は是れ不思議の機能をいふ。是くの如く、四重の神呪を以て、般若を讚歎しおはりて、呪を説きて云く、揭諦揭諦等と。この揭諦は梵語。翻じて行といふ。行は即ち修証、修証は即ち觀照、觀照は即ち、事に触れずして知り、縁に対せずして照す底の、仏祖の要機なるのみ。要を以て之を言はば、仏祖正伝の坐蒲団、是れ大般若の渾崙なり。永平祖師に行持の卷あり。実に有り難し、有り難し。〔宝永記〕

と、宏智の『坐禅箴』を踏んで澄明である。

仏の要機、祖祖の機要、非思量に安住するを妙法蓮華と名づく。縁に対せずして照すを光明真言と名づく。身心不動を安樂行品と名づく。凡聖等一を華嚴經の円融無礙と名づく。作仏を求めざるを大仏頂陀羅尼と名づく。善惡を思はず是非を管せざるを消災吉祥と名づく。起滅の脱落を照見するを般若心經と名づく。縦ひ八万四千の經論あるも、また悉く仏祖の要機を註するなり。もし此の要機に参得せずして、ただ經文を翫ぶ者は、また縦ひ一代藏教を暗誦するも、ただ結縁の分際なるのみ。〔宝永記〕

と舒べ、仏道の真際を挙揚しつづけて倦むことのなかった損翁の学人提携は、いつの場合も、宏智・道元に慕直なる『坐禅箴』によって貫通せられている。「仏事を行ずるの最要は、毫も自己の力を用いないことである」と（『宝永記』取意）と言った損翁は、一日、自己の心境を開陳して、「順境逆境は実に夢幻泡影なり、常に両頭を超越す。是を衲僧本分の事となす。山僧一住一紀、この本分の事を提撕して、人と争はず。是の故に日常安楽なるのみ」（『宝永記』）と述懐している。

損翁の身長は、五尺五寸に充たなかったという（『宝永記』）。しかしながら損翁は、その渾身を奮って永平の仏法に随順し、混迷の時流に超出して、東奥の一隅に純禅の法燈を掲げつくした、一大巨人であったということが出来る。